

福島は殺せない

— 私に影響を与えた1冊 —



弦楽器イルカ



誰かの人生に影響を与えるって、考えてみるとホントにすごい1冊だよ。オレの書いた何物かが誰かに影響を与えるなんてとても考えられないけど、ただ自分が書いた文章が一番変えたいのは自分自身の生き方かなって思う部分はあるよ。それくらいのインパクトは込めなきゃって日々あがいてるし。ちなみにそういうオレが次書こうと思ってるのは、「福島を殺しに行く物語」なんだけども。てへぺろ(・<)

いやなに、そんな顔しないでよ。つまりはじめから書くとさ、そもそもは阿部和重の『ニッポニア・ニッポン』って、トキを殺しに行っただけ失敗する話から着想を得たんだ。過去にあの有名な新人賞の候補作で、受賞逃した作品。確かに読ませる話だし真面目な作家だとは思いますが、殺す相手が鳥でしかも殺せずに終わっちゃうのがすごく残念だった。もちろん挫折に至るまでの紆余曲折を描くのも文学なんだろう。ただフィクションにしちゃ設定と結末がちょっと予定調和っていうか、どうせ虚構で未遂なら都知事の一人くらい殺りに行ってほしかった。そしたら「俺の足をすくいに来やがった」って例の閣下一杯喰わすくらい、選考会も衝撃的だったかもしれないし。

ならもういっそオレが都知事狩り行くかって思う時期もあったんだけど、本気の殺意じゃないから説得力が足りないって気づいた。しかも遅いしね。じゃ、何を殺しに行けばオレにとってより切実なんだろうって考えたら、成人まで生まれ育った福島に思い至ったってワケさ。

ただ「福島殺す」って言っても所詮、眉唾もんの大風呂敷だよ。そこで、少しでも意図を伝えるためにあえて脱線、今さらの本題に戻るけど、オレにとっての1冊は村上春樹『風の歌を聴け』だね。生き方というよりは考え方、あとたぶん書き方に大きな影響を受けた。その高2の夏まで、名探偵に解かれるべき謎や、思春期のバカバカしくも熱を帯びた反抗や、多種多様な人生がぶつかり合うスペース・オペラが詰まっていたって当然と疑わなかった本の中に、ただ何でもない日常が綴られていた。大きな事件は何一つ起こらないけれど、その描写のリアルさにおそろしいほど惹きつけられた。どうしようもなくこうとしか生きられない自分の顔が、物語の中からじっと見つめてくるような感覚。衝撃的だった。

ちょうどその当時オレは福島をひどく憎んでた。逃げたくて、でも現実にはどこにも逃げ場所がなかった。将来の自分に向かって、お前が幸せなのは今のオレの不幸があるからだ、絶対に忘れるなって何度も呪ったよ。もがきながら、精神的な逃げ場所を物語に求め、自然と書く行為自体が救いになっていた。だからその小説に衝撃を受けたオレは、一歩でも近づきたくて、更に数ミリでも先へ進みたいと願って、当時のリアルな想いを必死で書いた。けどネットもなかった時代、当然のようにその文章は誰にも届かなかった。

そして今たくさん届かない想いがまた、あの場所に留まっているような気がするんだ。「推進派」とか「廃絶派」とか「故郷を守ろう」とか「全員避難しろ」とか「大丈夫」とか「絶対ダメ」とか、立場の看板を掲げて殴り合う喧騒の中、実際その場にいる人間が素通りされて透明になってる。オレが代弁者になれるとは思わないけど、そこに書く意味があるんじゃないかと思う。

あの場所に閉じ込められてた当時の、個人的な絶望を引きずり出す。そして善し悪しじゃなく、ただ全ての根源である福島を殺しに行く。「その日」をなかったことにするために。

皆、心の底じゃそれを望んでるよ。だって大半のドラマも小説も勝手になかったこと

になってるんだ。無視されるのは殺されてるのと同じ。いや、自覚がないだけよりタチが悪い。だから、ちゃんと供養できるようにこの手を汚したいんだ。

でもきっとダメなんだろうな。今までだって誰も殺せなかった。たとえフィクションでも福島は殺せない。オレの絶望は逃げられないまま、ただ皆自分が一番大事だから誰も殺さず懸命に生きようって、ご都合主義の結末にひねり潰される。あの日を境に被災地から逃げてるオレにはそれしか書けない。

ただ、福島から逃げようとするあの頃のオレと、福島を殺しに行く今のオレが出会って、届かないはずの声が重なるその瞬間だけでも伝えられたら、オレとキミの間に影響の欠片くらいは残せるかもしれないなんて思うんだ。あと象も平原に還るんじゃないかなんて。ついでにセシウムも原子炉に戻るんじゃないかなんてね。いちいち笑えない冗談だ。

それじゃ、文字数もあるからそろそろお暇するけど、続きが書けたら『[月オパ](#)』に連載するつもりだよ。最後、ここまで読んでくれた御礼に、せっかくだから『風の歌を聴け』からあの名言を孫引きして幕引きとしよう。またね。

「昼の光に、夜の闇の深さがわかるものか。」

ひとこと

現在この国では、「人類に貢献する」という名目で、「安全だから大丈夫」と教えられたたくさんの子供が、「安全かどうかのデータ」のサンプルとなっています。私が今最も民意を問うべきと思うのは、推進や反対に関する議論よりも、「未来でなくこの瞬間、子供たちを被験者に行っている事実を大人は黙認し続けていいのか」という問いです。

それがこの小さな風の中にある、聴いてほしい声でした。

ありがとうございました。